

論文

山村・都市交流が山村高齢者に与える効果*1

—宮崎県諸塚村の住民アンケートより—

浅田慎也*2 · 佐藤宣子*3

浅田慎也・佐藤宣子：山村・都市交流が山村高齢者に与える効果 九州森林研究 57：18-21, 2004 近年、日本の山村は過疎化・高齢化が一層進み、集落消滅など危機的状況に陥るところも出てきている。こうした状況の中で山村の高齢者の暮らしや役割について考察することは、山村社会の将来を考えるうえで重要である。本研究では宮崎県諸塚村を対象に、交流事業へ的高齢者参加の現状とその効果について、村で実施された村民アンケート結果を基に考察を行った。その結果、交流事業の種類によって高齢者の参加状況にはばらつきがあるものの、若い世代に劣らず参加をしていること、また参加率の高さには地域差があることが分かった。さらに、交流事業に参加したことのある高齢者と参加したことのない高齢者を比較してみると、参加したことのある高齢者のほうが、悩みが少なかったりボランティア参加への意欲が高いという意識の違いがあり、高齢者が交流事業に参加することの重要性が明らかとなった。

キーワード：山村，高齢者，交流事業，自治公民館

I. はじめに

山村では、高度経済成長期以降、過疎化・高齢化が進行し、90年代には人口動態が社会減から自然減へと移行した(5)。これらの現象を危惧する報告は多いが(4)、高齢化した山村社会の中で高齢者の果たす役割を把握した報告は多くは無い。それでも近年、山村において高齢者が果たしている役割についての分析が、松野や中村などからされており(1, 2, 3)、農林業の労働力としての役割や、地域の文化・伝統の継承者としての役割が報告されている。

本研究では、そのような高齢者の役割についての実態把握の一つとして、山村活性化の一つの方策とされている都市との交流事業と高齢者との関わりについて分析することを目的としている。

II. 調査地の概要と調査方法

対象地は宮崎県の諸塚村である。諸塚村は林業立村を掲げ、林業・椎茸・茶・牛の四本柱による農林複合経営や、独自の自治公民館組織などで知られている。また一昨年から、「諸塚村のくらしと自治公民館活動についてのアンケート」を18歳以上のすべての村民に対して行い、各公民館の現状と、村民の意見などの把握を試みている。このアンケートは、「回答者の経歴や家族について」「実行組合及び自治公民館活動について」「地域での生活について」「老後の生活や福祉について」「山や農地の管理について」「行政に対する意見について」などからなり、その対象者数は

1,874人、有効回答者数1,439部、有効回答率は約77%であった。これまで多くなされた世帯主中心のアンケートとは異なり、高齢者や若者、女性の意見が反映されているのが特徴である。本研究のデータもこのアンケート結果に基づいている。

また本研究では一般に高齢者と呼ばれる65歳以上を対象としたが、アンケートの集計では65歳～74歳と75歳以上に分類した。これは近年、高齢者と一口にいっても「前期高齢者」(65～74歳, 310人)と「後期高齢者」(75歳以上, 180人)では農林業への従事状況や意識が異なるとされているからである。

III. 諸塚村の交流事業

諸塚村では、宮崎県の「フォレストピア宮崎」構想や、全村森林公園化構想などの流れを受けた交流事業が数多く行われている。例えば、日本一早いと言われる諸塚山の山開きや、諸塚産材を使った家づくりを進めている産直住宅事業、地元の人と一緒に地域資源を再発見しようとする地元再発見ツアー、昔ながらの民家を宿泊施設にした森の古民家などである。

これら交流事業に、村民は、特に高齢者はどの程度関わっているのだろうか。これを示すデータとして交流事業に、「関わったことがある」「関わったことがあり、今後もかかわりたい」「関わったことのある高齢者」の割合を表-1に示した。「関わったことがある」割合は、交流事業によって差はあるものの、一度関わった人が「今後も関わりたい」と考える事業が多いことが分かる。また、高齢者の参加率も全世代平均の参加率と比べると低く

*1 Asada, S. and Sato, N.: Effects of interchange activities between mountain villages and cities on the aged in mountain villages

*2 九州大学大学院生物資源環境科学府 Grad. Sch. Biores. Bioenvir. Sci., Kyushu Univ., Fukuoka 812-8581

*3 九州大学大学院農学研究院 Fac. Agric., Kyushu Univ., Fukuoka 812-8581

なるものの、山開きなどのように大きな違いが無い事業も存在する。

このように数多く行われている交流事業への高齢者の参加状況を公民館ごとにグラフにした(図-1)。どれか一つでも交流事業に参加した経験がある場合、参加者とみなしている。村内に16ある公民館によって、同じ村内でも参加状況が大きく異なることが分かる(最高-飯干94%、最低-松の平・川内36%)。この理由としては、交流活動実施場所との位置関係や公民館活動の活力などによって差が生じていることが考えられる。このうち高齢者の参加率の高い交流事業である、諸塚山山開きが開催される地区であり、交流事業への高齢者の参加状況も二番目に高い飯干公民館を取り上げ、交流事業への参加率の高さが高齢者の意識とどう関わっているのかを見ていくこととする。

Ⅳ. 交流事業と高齢者との関わり

1. 飯干公民館の例

飯干公民館は諸塚村で最も村中心部から離れた、奥地の公民館である。本地区で行われている交流事業が諸塚山山開きである。毎年三月の第一日曜に開かれるこの行事は日本一早い山開きとして知られ、人口150人、高齢化率40%以上の飯干地区に毎年約1,500人も参加者が訪れる。飯干公民館は村内でも高齢化率の高い公民館なのだが、非常に活気のある公民館としても知られている。所属する公民館の特徴についてアンケート結果から見ると、「祭りや伝統を大切にしている」という意識(回答した飯干公民館の高齢者の中で、本意識を持っていると回答した割合100%:村内の高齢者の中で本意識を持っていると回答した割合88%)は回答者全員が持っているし、「新しいことに取り組める雰囲気がある」という意識(同54%:同44%)や「やると決めたらみんなが協力する」という意識(同89%:同81%)でも村内の公民館の中で上位に入っている。交流事業への参加と、地域のまとまりや積極的な意識とは何か関連が予想される。

2. 交流事業参加者と不参加者との意識の差異

そこで、交流事業に参加している高齢者と、交流事業に参加しない高齢者とを分けて、生活上の悩みについて分析した。アンケートでは17の項目を提示し、悩みと感じる項目全てを選択してもらった。

まず、老後に関する悩みについては65~74歳、75歳以上の各年代において、8%~10%ほど参加者のほうが悩みを持っている人の割合が小さい、という結果がでた(図-2)。

次に、地域の付き合いや人間関係の悩みについては、75歳以上では違いは見られなかったものの、65~74歳では参加者13%に対して不参加者7%と、6%ほど悩みを持っている人の割合は交流事業参加者の方が小さいという結果になった(図-3)。

逆に地域の将来に対する悩みについては、各年代とも、参加者の方が不参加者より悩みを持つ人の割合が2倍以上大きいという結果になった(図-4)。これは、交流事業に参加することで自分達の地域の将来を考える機会がふえたことが理由ではないかと思われる。事実、自由記入欄には「交流事業への参加が、地域のことを見直すきっかけになった」という意見もあった。

最後に、ボランティア活動に参加したいと思う人の割合も、参

加者の方が不参加者より多いという傾向が指摘できる(図-5)。しかもその傾向は75歳以上の年代で強く出ており、不参加者が38%に対して参加者では77%と、約40%もの差ができています。アンケートでは、「共同作業の参加状況を尋ねる質問とは別に、あえて「ボランティアについて」の質問を設けた。なぜなら「ボランティア」とは、これまで山村で当たり前に行われてきた、地縁・血縁関係で行動する「共同作業」という名の無償労働とは異なり、メンバーの自発性に基づいてやりたいことを選んで実践する活動である、と位置付けたからである。図-6は65歳以上の高齢者が、共同作業とボランティアのそれぞれに参加する(参加したい)割合を交流事業への参加不参加別に調べたものだが、ボランティアでは29%、共同作業では21%と、交流事業に参加するか不参加かの差が大きい。これを75歳以上を対象とするとさらに違いは大きくなる(ボランティアでは39%、共同作業では9%)。つまり共同作業とボランティアとは異なるものであり、山村の高齢者にとって交流事業に参加することは、これまでの共同作業とは違う「ボランティア」の意識を高めることに寄与していると予想できる。また山村活性化策のひとつである交流事業では、共同作業という側面もあるが、ボランティアという自らが選択して行う活動が特に重要な部分を占めており、交流事業参加とボランティアの意識の高まりが密接につながっているという意味で、高齢者の交流事業参加の意義は大きいと考える。

ここで、交流事業参加者と不参加者の間で、どのようなボランティアで特に意識の差が大きいのかを明らかにすることは、高齢者参加の都市・山村交流のあり方を考える上で意味のあることだと考え、ボランティアの種類別に考察した。すると「こどもたちのためのボランティア」で特に、参加者と不参加者の違いがあり、このボランティアをやってみたいと思っている交流事業参加者の割合は31%と、不参加者の約2倍に上っている(図-7)。これは交流事業に参加することで、村の子供たちを大切にしようとする意識が高まっているといえるのではないかと。事実、参加者の感想には、「自分達(大人)が楽しく活動しているところを見て、(今村内にいる子供たちも高校進学時には一旦村外に出してしまうので)子供たちが村の良さに気づき、将来村に戻ってくるきっかけになるかもしれない」といった強い思いを持ったものがある。

他にも交流事業に参加した人からは、「自分の教養を高めることが多い」と言う声や、「地域の良さを見直すきっかけとなった」という声が出ています。

これまで見てきた交流事業と参加者のボランティアや地域のことに関する意識の高まりとの関係は、単に意識が高い人が交流事業をやっているという風にも取れる。それも確かに考えられるが、ここでは先に挙げた参加者からの様々な声に代表されるような、交流事業に参加することの効果や意義を強調しておきたい。

これらアンケート結果から見る交流参加者の意識をまとめると、第一に老後の悩みや人間関係の悩みが少ないことが挙げられる。この理由としては、交流に参加することでその地域にまとまりがあったり、交流が生きがいにつながったりしていることが考えられる。

二つ目には、ボランティアの活動意識や、交流・連携の意識、地域の将来に関する意識が高いことが指摘できる。つまり、地域の将来に役立ちたいという意識が高いといえる。

V. ま と め

これまでの考察により、高齢者にとって交流事業は、農林業などで果たしている役割とは異なった役割を担える場であり、そのことが自分達の暮らしの中でボランティアに対する積極的な意識を生み、ひいては地域の活性化にも寄与することが期待できると考えられる。つまり、今後の山村社会にとって、高齢者を組み込んだ交流事業を行うことは重要だといえる。

ただし、今回の考察はアンケート結果のみで行っていることに留意し、今後は実際に交流事業に関わっている方から聞き取り調査などを行い、交流事業の内容にまで踏み込んだ、高齢者が活躍できる山村活性化のあり方に関する詳細な分析が求められる。

なお、本論文は科学研究費補助金「山村の持続型社会への転換と森林保全の地域連携に関する研究」(研究代表者：佐藤宣子，平成13～14年度，課題番号：13680646)による研究成果の一部である。

引用文献

- (1) 松野薫・宮林茂幸 (1998) 日林論 109：23-24.
- (2) 中村綾 (2002) 九大演報 83：63-77.
- (3) 中島真・小池正雄 (1999) 信州大演報 35：83-89.
- (4) 日本村落研究学会編 (1998) 山村再生 21世紀の課題と展望, 342pp, 農山漁村文化協会, 東京.
- (5) 山本努ほか (1998) 現代農山村の社会分析, 191pp, 学文社, 東京.

表-1. 交流事業に対する村民の意向と現状

	関わったことがある*1	今後も関わりたい*2	高齢者の参加率*3
諸塚山山開き	37.3%	81.5%	34.6%
ふれあい釣り大会	30.6%	76.8%	19.2%
スカイマラソン大会	20.8%	57.5%	6.6%
森の古民家	10.6%	80.0%	9.2%
諸塚村産直住宅事業	10.3%	89.2%	10.4%
郷土芸能体験ツアー	8.9%	67.7%	7.3%
地元再発見ツアー	5.7%	67.7%	6.0%
大豆応縁クラブ	3.2%	62.9%	2.3%

資料：「諸塚村のくらしと自治公民館活動についてのアンケート」(以下、図1～図7も同様)

注：*1 高齢者以外も含めた回答者総数のうち「関わったことがあり今後も関わりたい」または「関わったが今後はあまり関わりたくない」と回答した人の割合

*2 *1のうち、「関わったことがあり今後も関わりたい」と回答した人の割合

*3 50歳以上の回答者のうち「関わったことがあり今後も関わりたい」または「関わったが今後はあまり関わりたくない」と回答した人の割合

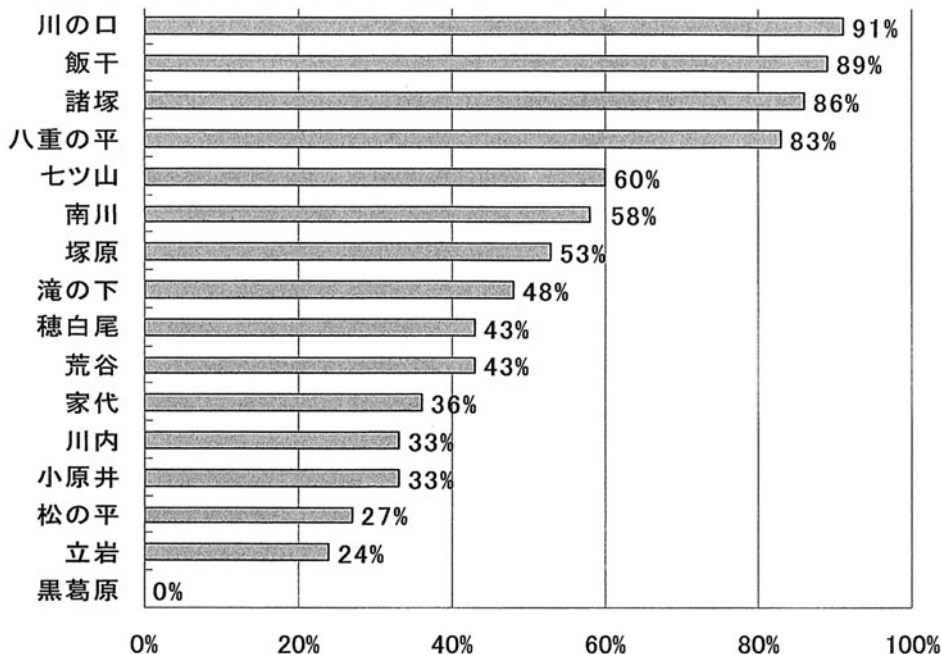


図-1. 交流事業への高齢者の参加状況

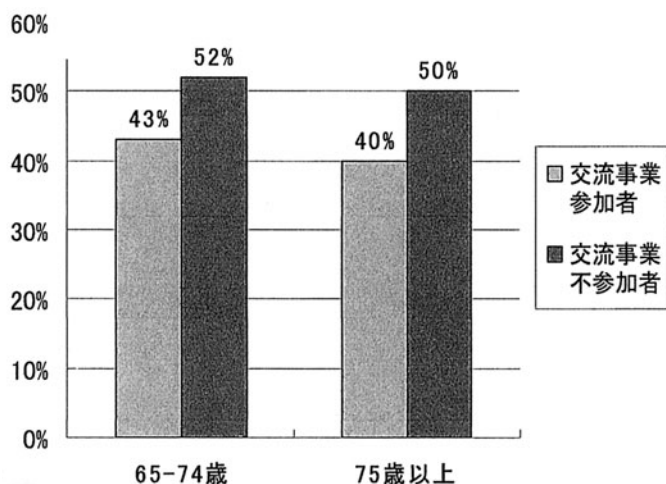


図-2. 老後の悩みを持っている人の割合

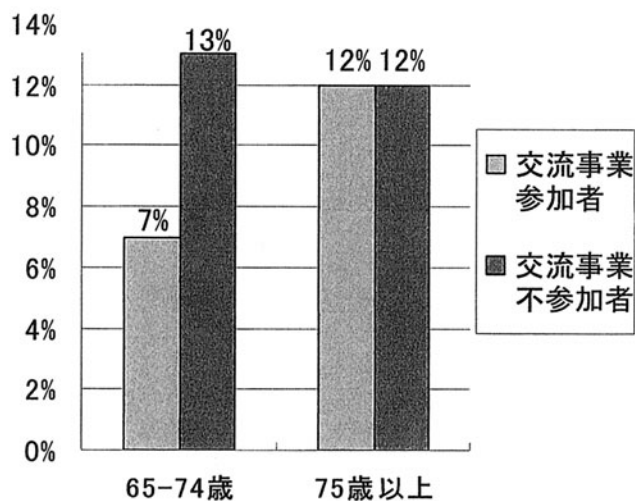


図-3. 地域の付き合いや人間関係の悩みを持っている人の割合

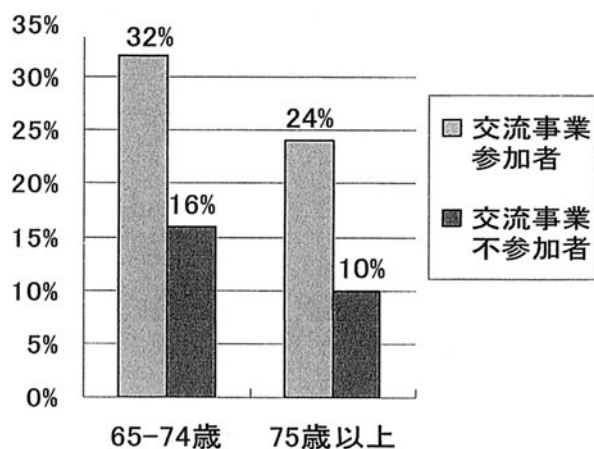


図-4. 地域の将来について悩んでいる人の割合

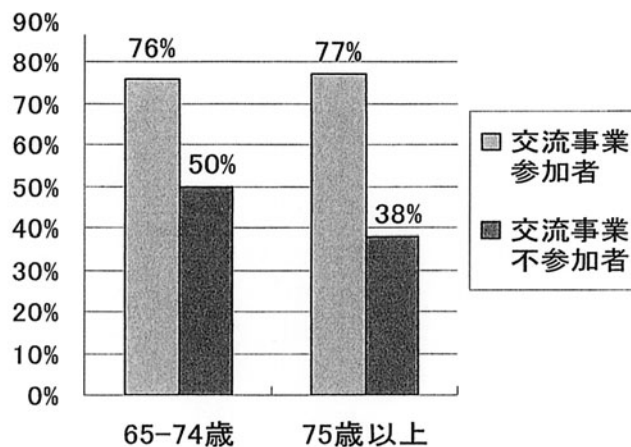


図-5. ボランティア活動に参加したい人の割合

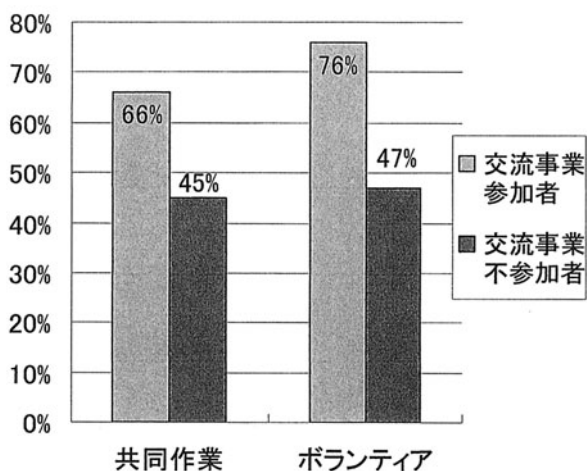


図-6. 65歳以上で交流事業に参加している人と参加していない人別の、共同作業とボランティアにそれぞれ参加している（参加したい）人の割合

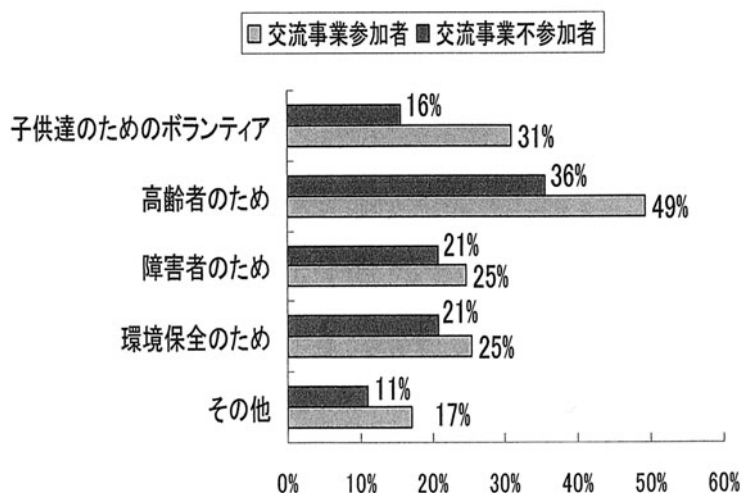


図-7. ボランティア活動別に見た、参加したい人の割合

(2003年11月4日 受付; 2004年1月13日 受理)